

## OB・OGの職場探訪

## テレビ朝日法務部

## 真田裕実子さん（2005年法学部卒）

訪ねていったのは5月も終わりに近い月曜の夕刻。中央大学多摩キャンパスからはほど遠い六本木の雑踏の一角、六本木ヒルズの中にある「テレビ朝日」が今日の目的の場所である。テレビ朝日法務部にお勤めの真田裕実子さん（25歳）にお目にかかるためだ。

真田さんは、2005年に法学部政治学科を卒業された中大OG。今年で勤務3年目を迎える。お忙しい中の取材を快諾していただいた。

待ち合わせの場所での初顔合わせに、真田さんは「よろしくお願いますね」と明るく出迎えてくださった。その笑顔が、少し早めの就活と考えていろいろ聞こうと気張っていた記者の緊張をほぐす。でも失礼をしてしまわないか、と心配だ。端から先が思いやられる。



机上には六法に判例集、それにドラえもん

社屋は特徴的な形状のアーキテクチャー。主にスタジオがあるという地下は2階、地上は8階まである。「私のオフィスは7階です」と真田さん。

案内してもらった職場には、デスクがずらり。

その入り口に近いところに据えられている真田さんの机には、判例や六法が積んであった。空いた

スペースには、「テレビ朝といえは」のドラえもんの山、ヤマ、やまである。

同じ階にある社員食堂の一角でお話を聞いた。窓からは、話題の東京ミッドタウンも手の届きそうなくらい近くに見える。

——真田さんの会社でのお仕事は。

「契約、訴訟、それに著作権法、会社法、景表法を始めとした法に基づく処理や（ホットなところだと）買収防衛などを担当する部署に所属しています。いわば企業の法務に関して戦略的にマネジメントする役割ですね。とはいっても、規模は部長を入れて5人と小規模なのですが。1件ごとに複数の担当者が就くことになっていて、訴訟だと私はいま4件に関わっています」

——5人で会社全体の法務を担当するわ

けですわね！ 少なくとも大変なこと  
はないのですか？

「そうですね、若手は私だけ  
みたいなものですので頑張っていま  
す。皆さんベテランですし、この  
仕事は、実務の積み重ねがものを  
いう面がありますから。毎日勉強  
です」

——案件は多いのですか？

「社内様々な部署から相談が  
絶えません。マスコミの人間であ  
る以上、みんな心配なところがあ  
るんでしょう。たとえば、バラエ  
ティ番組だと地上波でどこまで放  
送していいのとか。法律に敏感  
になっているようで」

## 年長者には年齢増し？ で対応することも

そんな法務部を、真田さんは「駆  
け込み寺」と表現した。きっちり  
と一本に結び上げたストレートの  
髪と、ハキハキとした物腰とが、  
仕事に対する積極的な姿勢と自信

をあらわしているようだ。

もちろん、若さゆえの苦勞もある。法務部は10  
万円単位から数千万円単位の契約書にも目を通す。  
担当者に依頼されてゼロから契約書を作成したり、  
契約書の審査のコンサルタントをしたりするなど、  
自分よりもはるかに年上の人と対等に話さなけれ  
ばならないことがよくある。

「深刻な相談ごとをされるときに、あんまり若  
くって不信がられるのもね」と苦笑い。そんなと  
きは、「うんうん、それで？」のように、必要性  
を感じて“年齢水増し”で対応することもあるの  
だとか。そんな真田さんを想像してみると、少し  
おかしい感じもする。

真田さんは在学中、国際政治経済を専攻してい  
た。滝田賢治教授のゼミに所属し、パレスチナ紛  
争や石油パイプラインについて学んでいた。「法  
学部でしたから、今の仕事に関しては漠然となが  
らはイメージできたけれど、本格的に勉強を始め  
たのは仕事についてから、といつていいと思いま  
すね」という通り、大学で勉強してきた事柄だけ  
で選んだ職業ではないようだ。

## 「やっぱり人脈って大切」：

ヒミツは「サントアマニア・ショートフィルム・



明朗・快活な真田さん

コンテンツの盛り上げ、若手クリエイターの発掘を目的にショートフィルムの作品を募集して、フェスティバルを行い、評判のよかった作品をネット上で公開するといった活動だ。

メンバーは有志で構成され、自ら企業に出向いてスポンサーを取り付けてアマチュアを含む無名のクリエイターたちに作品発表の場を与えたり、集まったコンテンツをプロダクツ(商品)として映画会社などに売り込む時の仲介役を果たす。

真田さんは、これを「奇襲をかける」と表現した。

「1年生の終わりから3年生にかけて、この団体の一員としてフィルムフェスティバル運営に携わりました。資金提供を受けるためにも、やっぱり人脈って大切で、共感してくれた大学教授に顧問になってもらって、スポン

サーを紹介していただいたりしていました」

真田さんは、フィルム募集のまとめ役を担った時期に切り開いた人々とのつながりは重要だった、とも教えてくれた。このときのことを振り返って、「商品性があるものはいろんなところに転がっている、ということ。加えて、製品を持つている会社には興味を持ちました。運営側にまわる面白さもこのとき学んだ気がします。人生のポイント、かな」と真田さん。

テレビ局というメディアに勤めているからといって、仕事がそれだけに特化しているのかというところではない。それぞれの専門者集団が集まって、企業全体として経済活動をしているのだ、ということが分かった。

### フレンドリーな人事部に惹かれ、テレ朝へ

就職活動について聞いてみた。年々早くなってきたという就活戦線、おおいに気になるところである。

—— 始めた時期は？

「面接が一番早かったのがこの会社でした。2月ごろにエントリーして。メーカーなどは4月ごろかな? テレ朝は、人事部の人たちがフレンドリーで雰囲気の良い会社だなーって思ったんです。

フェスティバル」という真田さんが学生時代に打ち込んだ活動のひとつに隠されている。これは、三多摩の活性化、日本のBB(ブロードバンド)

スティバル運営に携わりました。資金提供を受けるためにも、やっぱり人脈って大切で、共感して

くれた大学教授に顧問になってもらって、スポン

そういうところばかりじゃないですからね」

真田さんは、大学院に行つて勉強するより、早く自立したい。それにはお金を稼がなくてはいけない。だから就職したい、という考えがあつたという。理由付けが明快だ。そして仕事を選ぶときにはまず、「日本の企業」という前提があつた。——日本の会社にこだわりますか？

「16・7歳の頃、留学していたフィンランドはNOKIAという企業が国の経済を引っ張っている状況でした。フィンランドにおけるNOKIAのような日本の「国の宝」の企業なら、きつと得るものがあるだろうと考えました。何か恩返しをしたいと思つて、というとおこがましいですけど(笑)」

そこで、真田さんが、就活を控えた学生代表としての記者に、「あなたが聞きたいことは何かある？」と促してくれた。折角なので聞きにくいような気がしていた素朴な疑問を思い切つてぶつてみた。今さら、という感じかもしれないが、記

者が死活問題ながらに捉えていた課題を。

——服装については、気をつけたことはありますか？

「型にはまった黒いスーツは避けましたよ。こ



「人脈って大切です」

心なしか、胸のつかえがおりたような気がした。これも記者に向けて投げかけてくれた言葉のように思えてならないが、なかなか職種を絞れないで悩んでいる人に対し真田さんは、企業を選択する際には「先人観があるといけな

い」という。「文系理系にとらわれず、みんなが同じスタートだと思つて。やりたいことがあるにしろ、まだ見えていないにしろ、自分から発信していくことが大切」と笑顔で力強く語ってくれた。

——最後に、ヒルズで働く、つていう感覚はいかがですか？

「テンションあがりますよ(笑)。六本木が私の街っていう感じで。様々なお店、会社、そしていろいろな人々。とても刺激になる場所です」

これは自分がのぞむ職種にもよるけれど、奇をてらうようなものでなければ、あとは自分が何を持っているか、文字通りカラーをだすだけだから」

——ちなみに真田さんは？

「薄いベージュを着ました」

感じたのは、就活では企業側からみるとき「自分」は商品であるということだ。個性をうまく売り出して、アンニュイな就職活動を素敵なものに転じたい。

真田さんのお話を伺つてはつきり

(学生記者 竹下奈穂 経済学部3年)